

「五歳の先生」

この春、私の文部科学省への出向に伴い、家族で地方から東京へ引っ越してきた。息子も新しい幼稚園に通うことになった。親としては心配だった。慣れない環境の中で寂しい思いをしないだろうか。けれど、そんな心配はあっけなく裏切られた。

息子は園に通い始めて、すぐに友達をつくった。先生から「もともと園にいたみたいですね」と言われるほど自然に馴染んでいたという。親が心配していたことなど、息子にとっては何でもなかったらしい。

一方の私はどうだったか。初日はパソコンの設定だけで一日が終わった。どのファイルがどこにあるのかも分からない。誰に何を聞けばいいのかも分からず、毎日必死に周囲についていく。これまでそれなりに経験を積み、多少の自信も持っていたはずなのに、新しい職場ではそんなものは簡単に吹き飛んでしまった。自分の無力さばかりが目につく。

そんなある日の夜、私は妻に愚痴をこぼした。

「やっぱり若くないと、新しい環境には適応できないよな」

言葉にしてみると、自分でも驚くほど後ろ向きだった。知らないうちに、環境の変化から逃げようとしていたのかもしれない。

すると妻が、保護者参観で見た息子の様子を話してくれた。

息子の幼稚園では右肩に名札を付ける。息子は友達に話しかける前に、そっと名札を見て名前を確認し、「〇〇ちゃん、一緒に遊ぼう」と声をかけているのだという。

その話を聞いた瞬間、胸を突かれた。息子はただ何となく友達ができたわけではなかった。転園してきた自分から声をかけなければ輪の中には入れない。名前を呼んだ方が相手との距離が縮まる。そんなことを五歳の子供なりに考え、一生懸命工夫していたのである。

私は新しい環境になじめない理由を年齢や立場のせいにしていた。息子の話を聞いた夜、自分が少し恥ずかしくなった。誰が教えたわけでもないのに、必死に新しい世界と向き合っている息子。その姿は、思っている以上に頼もしかった。

出向期間は限られている。残りの日々を「早く終わらないかな」と数えながら過ごすのか、「ここでしかできない経験をしよう」と前を向いて過ごすのかで、その価値は大きく変わる。

五歳の息子にできることなら、大人の私にもきっとできる。

今日も少しだけ勇気を出して、自分から一歩踏み出してみようと思う。息子の背中に励まされながら。

(M・S)

